

# 富士南麓の土壌と土地利用

鼓 ゆり子

土壌は人間にとって最も重要な資源のうちの一つだと考えられている。人間の活動は、地表わずか数十センチの土壌にことごとく依存してきたといわれている。<sup>注)</sup> 放っておけばその土壌は地表からはがれていってしまう。そんな心配を富士南麓の人々は特に強く感じて生きてきたのではないかと考えた。その理由は二つある。一つは傾斜地であること、もう一つは下層一帯に富士マサという盤層が存在することである。今回は、この土壌という観点から富士南麓の地理学的特徴を明らかにしたいと思い調査を行なった。論文の構成は概ね次の通りである。

第一章地域概観（人文の概観、気候の概観、地形と地質の概観）、第二章地形・地質・土壌（対象地域の溶岩流と火山灰、火山灰層と表層土壌）、第三章富士マサについて（富士マサとは何か、富士マサの分布、富士マサと人々の生活、富士マサを調べて）、第四章対象地域の土壌と植生・土地利用、第五章土壌測定（測定の目的とサンプリング地点、測定結果とまとめ）

南麓は同じ富士山の他の山麓に比べて気候が温和で真冬日がない。従って農業は畑作中心である。しかし、マサのために土壌流失が激しいところではお茶が作られている。近年、お茶畑に切り替えたところが増加している。お茶は土壌が比較的浅くて下が岩盤になっていても育つし、土壌の流失を防ぐ役割も果たすからである。

この地域は新富士火山活動による溶岩と古富士火山泥流および砂礫層によって構成されていて、前者は階段状に配列して重なり合ったためにこの山麓の微地形を複雑なものにしている。その溶岩原の表面には褐色火山灰層または黒土層が載っており、表層の腐植土層の層厚は約20センチから50センチである。マサはこの褐色火山灰層と黒土層を母材にしているが、その成因はまだ化学的・鉱物学的に明らかにされていない。マサの性質は固く凝結して土の構造面をもたないということである。これは、農耕の際に土壌侵蝕、過湿、根圏領域の縮小を引き起こすことになり、この地域の土壌生産性を低くしている。そのため十年程前に大々的にマサ抜きが行なわれた。しかし、マサの分布域が広く、複雑であったために全部をカバーしきれなかった。マサ抜きをすれば土壌は良くなるが今度は礫が増えるなどの問題もあった。そこで、盛土をしたり樹園に切り替えたり工夫がなされた。また、堅い地盤を逆に利用して重たい鉄鋼・機械などを扱う工場が立地したことは興味深い。

さて、土壌を物理的・化学的に分析して考察するために行なった三相分布、腐植形態分析からは次のような結果が得られた。

マサが中層にあたる第7地点は液相の占める割合が大きかった。すきま率も高く、真比重も低かったが、マサのところはその中では真比重が最も大であった。腐植化は、上中下層ともに進んでいるが、マサの層は相対的に低くなっていた。第2地点は杉の植林地であるためか腐植化は上下層とも遅れており、真比重は高かった。高台にある第3地点も針葉樹植生のため腐植化の進んでいるA型ではあったがそれ程高い値を示していない。第4地点は下層が火山灰土壌の下層によく見られるP±型で腐植化

は進んでおらず真比重も高かった。ここ以外は下層の方が腐植化が進んでいた。

注) 富山和子「ニホンカモンカ私論」S54.文芸春秋12月号 p.286~311

## 「新潟県山古志村の 過疎現象に関する地理学的考察」

前川律子

山古志村は、越後山地の前山にあたる東山山地の西南端に位置している。東山山地は、一般に200~500mほどの標高を持つ丘陵性山地帯であるが、褶曲山脈であるため、その地形は複雑で、長い間、村内の集落間や村外との交通を阻んできた。このような地形と関係して、冬期の降雪量は多く、最大積雪量は、平均的な年で約3m、豪雪の際には5mにまで達するのである。また、この村は、第三紀層地すべり地帯としても知られている。このような自然環境下にあり、陸の孤島とも言うべき別天地であった山古志村にも、昭和30年代半ばからの高度経済成長の波は容赦なく襲いかかり、それを機として急坂を転がり落ちるような過疎化が始まったのであった。本論文は、人間と自然との調和が叫ばれ、山古志など山間の村に対する社会の要請が変りつつある中で、多少の落ちつきを見せ始めている「過疎現象」というものを、そこに暮す人々の生活や心情、またその歴史を映し出す鏡として見つめ直し、山古志における過疎現象の特質を浮き彫りにし、その本質を探ることを目的としている。そのため、まず、山古志村の人口構造や人口異動について把握し、次いで過疎現象に関わる諸条件から、村内における過疎現象の地域的差異を検討し、さらに、村役場による生活意識調査や聞き取り調査より窺われる住民の心情を加えて考察した。

山古志村の過疎現象の特色としては、東竹沢を始め、南平、種芋原等、村の東部の各地区において、竹沢、虫亀等西部よりも著しい人口・世帯数の減少が見られること、東竹沢や種芋原において、集団移動とも言うべきまとまった離村が見られるのに対し、竹沢、虫亀では、あちらで1軒、こちらで1軒というばらばらとした離村が見られること、村の東部と西部を比べると、西部において東部よりも人口減少率のピークを迎える時期が早かったこと、挙家離村者数の推移を見ると、昭和30年代半ばから現在にかけて昭和43年、44年をピークとする自然な山型を描いているが、ただ48年のみは例外的にその値が小さいこと、高等学校の新規学卒者のほとんどは、村外へ転出するが、新規学卒者以外の若者の転出、転入では、男子は両者がほぼつりあい、女子はむしろ転入超過の傾向にあること、人口ピラミッドは、かつてのロケット型から不安定なひょうたん型に移行したこと、などがあげられよう。

過疎現象と諸条件との関わりについては、一般に次のような傾向が認められよう。すなわち、根雪期間の長い地区、出稼ぎ率の高い地区、傾斜角度の大きい地区、地形的遮断性が見られる地区、地すべり運動の活発な地区、養鯉農家率の低い地区、農業への依存度の高い地区、同族共同体的性格の強い地区、山古志村として合併される以前の行政区分の名残りの見られる地区、道路状況(舗装率など)が悪く、無雪化も遅れている地区、DID都市までの所要時間の長い地区、夜間救急時の加療までの所要時間の長い地区において、人口・世帯数の減少率が大きいのである。出稼ぎは、閉ざされた生活を送ってきた村人たちにとって、外の世界と直接接し、その刺激を受ける機会であり、またそれ自体村にとどまったままでは生活できないことを意味している。地すべり現象は、土壤攪乱や緩傾斜地の